対話における「聞く／聴く」場をどのようにつくるか：認識的不正義の視点から

開催日時：2024 年 1 月 28 日（土）14:00-16:00 運営媒体：Zoom
参加者数：30 名

J-CEF スタディ・スタヂオ vol.25 は、「対話における「聞く・聴く」こと」をテーマにしました。これまでJ-CEFにおいても，「対話」に関する実践や研究成果について多く発表されてきました。民主主義社会において，多様な人と話し，社会を創っていくというプロセスが非常に重要なものとされてきためです。ただし，そうした「対話」を行う際，ついつい声が大きい人や知識が多い人の声に左右されてしまう，又は，場にはいるもののほとんど声を発さない人をついついいないものとして切り捨ててしまう，そうしたことに“モヤモヤ”経験をした方は多いのではないでしょうか。**民主的な対話において，どのように「聞く／聴く」ことを考えるべきか，**という点から，今回「子どもと政治」について研究や実践を進めてこられた西山渓さん（開智国際大学）に話題提供をお願いしました。

講演は 2 部構成で行われました。**第 1 部は「「聞かれているのに聴かれていない」ということについて」**として，オーストラリアでの実践での気づきを軸に「認識的不正義」という概念やその是正に向けてのあり方に関しての説明がありました。具体的には英語が拙い外国籍の子どもに「思いやり」としてネイティブの子どもが代弁してしまうことなどが例としてあがり，行った行為がたとえ善意であったとしても，当該の子どもや周りの子どもや社会に対して「害」が起こり得る。こうしたことが，聞くことに関する不正義としての「認識的不正義」と呼ばれるものです。

第 2 部は，「「よく聴いている」はどうやってわかるのか？」として，西山さんが日本で実施した実践を軸に説明が行われました。具体的には，市民的対話の傾聴についての評価を行うために開発された LQI（Listening Quality Index）を踏まえ，それを「既に人間関係が構築されている教室空間」で行うことを想定し，LQI を教室にいる人たちで作成するという実践の紹介がありました。この活動を通して，子どもたちは「聴く」ということの意味を再考し，これまでの従来の自分や他者のあり方を振り返るきっかけになります。さらに繰り返し活用することで，意識して傾聴の質を向上できるのではないか，という提案が行われました。

後半の参加者を交えたディスカッションでは，①自らの実践の中で，認識的不正義が起こっていると感じたり，改善すべきと感じる瞬間があった人も多くいたこと。それにも関わらず，②多様な障壁でその是正を行うことが難しいという意見が多く見られました。障壁としては，子どもや教師自身も認識的不正義のもとに置かれ，偏見への気づき・相対化が難しいこと，認識的不正義を助長する文化が学校や同僚にもあること，「聴くこと」に関する活動をどこで行うことができるか，といった問題が上がりました。また，そもそも「聴く」ことは能力なのか，価値なのか，といった問いもありました。

何となく感じてきた“モヤモヤ”を「認識的不正義」という概念で整理したことで，従来の実践を振り返った方も多くいたようです。本セミナーを契機に，多様な人が参加できるより包摂的な対話の場をどうデザインするのかという研究や実践が充実することを願っています。

（運営＆文責：川口広美・古田雄一）